記　念　講　演

中 世 山 城 の 魅 力

小和田（おわだ）　哲男（てつお）
（静岡大学名誉教授）

【講　演】

中世山城の魅力

静岡大学　名誉教授

小和田　哲男

ただいまご紹介いただきました小和田です。こういう発掘調査の報告会のようなところは，だいたい報告者は熱が入りまして，10分，20分延びるのが多いのですが，今日時計を見ていましたら本当に時間ぴったり，一人20分ずつで見事だなと思って感心して聴いていました。

今，紹介していただきましたように，私はＮＨＫの大河ドラマでは1996年の『秀吉』ですね，竹中直人さんが最初に秀吉役をやったあのドラマが最初で，その後２～３年に一度ぐらいずつ，主に舞台が戦国時代ということになると時代考証を頼まれています。実は来年2020年は『麒麟がくる』という少し変わったタイトルですが，主人公は明智光秀で，その時代考証を始めており，これは時代考証を始めて７作目になります。

プロフィール

1944年　静岡市生まれ
1972年　早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了
2009年　静岡大学を定年退官
現　在　静岡大学名誉教授
　　(公財)日本城郭協会理事長
研究分野　日本中世史，特に戦国時代史
主な著書　『日本人は歴史から何を学ぶべきか』
　　（三笠書房，1999年）
　　『戦国の城』（学研新書，2007年）
　　『名軍師ありて，名将あり』
　　（ＮＨＫ出版，2013年）
　　『家訓で読む戦国　組織論から人生哲学まで』
　　（ＮＨＫ新書，2017年）
趣　　味　城めぐり
　　地方のおいしい料理と日本酒を楽しむこと

今日の本題に入る前に一つだけ，今までやってきた中で，城との関わりで，いまだに思い出す時代考証の裏話がありますので，それだけ紹介しておきます。

2011年『江～姫たちの戦国～』，浅井三姉妹の末娘，江姫，彼女が主人公のドラマで，これは最初のシーンでしたね。織田信長が小谷城，例の浅井長政のお城を攻める。ご承知の方が多い

と思いますが，信長という人は平気でどんどん火をつけていった武将なんですね。お寺，神社，町，村，お城はもちろん，とにかく火付け魔と言っていいぐらいのどんどん焼いていった武将ですが，いろいろな文献が残っています。織田信長は小谷城を３年間攻めさせるのですが，火をかけていないんですね。というか，火をかけたという記述はないんです。

しかも，あそこは今，国の史跡になっていますから，結構，継続的に発掘調査が進んでいまして，今，掘っていますという情報が入ると，私も時間をつくって見に行き，掘っている人から生の証言をもらっているんです。いろいろ掘っているけれども焼けた痕跡は出ていません。文献的にも焼けていない，それから考古学的にも焼けた痕跡がないということで，私はその年の時代考証をやっていて，担当者に，小谷城は焼けていませんから絶対に火をつけないでくださいということで，焼かないことになっていたんですよね。

ところが収録の直前でしたね。小谷城を信長が攻めて，最後はとにかく自分の妹，お市の方，そしてお市が生んだ三人姉妹だけはお城を出るというその場面で，彼女が三人の娘を連れてお城を出る時に，お城のほうを振り返るシーンを撮りたい，その時に，どこからも煙が上がっていないとテレビを見ている人が小谷城を落城だと思ってくれないので，この時の言い草は今でも覚えていますよ。「ちょっとだけでいいですから火をつけさせてください」と言うんですよね。

ちょっとだけも駄目ですよ，焼けてないんだからということで断ったんですが，そこから先は，「これは演出上も必要なのでお願いします，お願いします」の一点張りで，あれは電話だったのですが，直接会っていたら土下座しそうな雰囲気だったので，これはちょっと立場もあるからかわいそうだなと思って，ではしようがない，ちょっとだけですよということでＯＫを出したのですが，出来上がったシーンは大々的に燃えていました。これはだまされたなということで，今もって覚えているのですが（笑）。

時代考証というのはそんな仕事もやっておりますが，今日は時代考証の話ではあり

ませんので，皆さんのお手元に簡単なレジュメを用意させていただきましたが，中世山城の魅力ということでお話をさせていただきたいと思います。

「はじめに」という所で「見直されてきた中世の山城」という書き方をいたしました。これは，それこそ今，私は先ほど紹介がありました公益財団法人日本城郭協会の理事長をさせてもらっているのですが，城郭協会というのは昔から任意団体としてあり，のちに文部省所管のいわゆる財団法人になりました。それから40年たった記念で，今から12年ほど前，城郭協会で日本100名城を選定しようという話になりました。

その時，理事長は別の方で，私は理事だったものですから，100名城選定委員の一人として，その委員会に加わって100を選んだんですね。その100を選んでスタンプラリーを始めたわけです。もちろん，その100の中には，ここでいうと広島城，それから安芸の郡山城といったのが入ったわけですが，その時に100を選んで，幾つかの基準があったわけですが，やはりどうしても入れたいんだけど落とさざるを得なかった城がいっぱいあったんです。

ですから，100と110，120というのは，その区別がつかない，落差はないということで，ちょっと残念に思っていたところ，今から５～６年ぐらい前からでしょうか。スタンプラリーで100全部回ってしまったよ，次はないんですかという声がたくさん上がってまいりました。それで私は，先ほど言ったように100名城を選ぶ時には涙をのんで落とした城がいっぱいあったので，これはそれをすくい上げるいいチャンスだということで，そのころ，私は理事長になっていましたから，理事の皆さんに諮って，続日本100名城を決めましょうということで今回決めました。そして，４月６日は単純な語呂合わせで城の日と決めているんですが，２年前の城の日に続日本100名城を決めて，そのスタンプラリーを去年の４月６日，城の日から始めています。

これも結構，皆さんに好評で，多くの方が100名城，200名城を訪ね歩くのですが，100名城の時には近世城郭がかなりの部分を占めていました。これは，やはり100名城というかたちになりますと，国宝の五天守は外せないし，重要文化財の櫓とか城門が

あるような所も外せないということで，近世城郭がかなりの部分を占めていました。もちろん100名城の時にも，近世城郭ではない戦国期の山城などもたくさん入りましたが，今度，続100名城を選ぶ段階になると，これは全国の城郭協会の会員の方とかにいろいろと推薦をしてもらって，その中からわれわれ選考委員が選んでいった過程で，中世の山城がかなりの比重で入ってきました。これは本当に私としてもよかったなと思っているんですね。

私が学生の頃，今から50年ぐらい前の頃は，それこそ城と言っても多くの方は建物がある所を城だという認識で，何もないような所は行っても無駄だよみたいな言われ方をずっとしていました。やはり私どもが調べに行き，入り口が分からない，登り口が分からない，そこで農作業をしているような人に「〇〇城はどこから入るんですか」と聞くと，「そこからだよ」と教えてくれるんですが，必ず歩き始めると「行っても何もないよ」と，行っても無駄だよみたいな声をかけられていました。私どもは，やはりそのころから空堀とか土塁とかそういったものを研究して歩いていったのですが，それがようやく多くの方に見てもらえるようになったという，そんな思いをしております。

それこそ，今から50年前，60年前の頃は，その少し後，高度経済成長期の頃になりますと，ゴルフ場とかマンションとかによって，かなり中世城郭が壊されたというちょっと悲しい歴史があるわけですが，最近はやはり行政の方の意識も変わってきて，少しずつ，ちゃんと発掘調査をして残すべきものは残すというかたちになってきたというところが，私はやはり時代の変化，あるいは多くの方が

講演風景

お城というものに目を向けるようになった，その成果だというふうに思っています。

ご承知のとおり山城・平山城・平城と，それこそある意味では山の高さによって分類しています。この山城・平山城・平城という分類は，実は江戸時代の軍学者が考えたもので，今はだいたいお城の概説書などを見てもその流れで分類しています。

では，どこまでを平山城と言って，どこから山城というのかというのは，定義があって定義がないようなもので，それこそ50ｍ，標高ではなく，比高（ひこう）が50ｍぐらいはだいたい平山城だろうなというのは皆さんの共通認識ですね。近世城郭でいうと，分かりやすいのは彦根城とか姫路城とか，ちょっと平らではないね，小高いね，だけど高い山ではないねというように，平山城というのは，あの辺りかというのは分かるわけですが，では山城というのはどこから言うかというのは人によって違います。

私はだいたい比高，麓からの高さが100ｍを超したものは山城と言っていいのではないかと思っています。もっと言えば，ある程度，整備された城ならば，麓から山頂の本曲輪，江戸時代でいう本丸まで，途中ちょっと休み休みでも20分ぐらいかかる，あるいは20分以上かかるのは，もう山城と言っていいのではないか，10分ぐらいで頂上まで行けてしまうのは山城ではないんじゃないかというふうに私などはよく言っているのですが，これなども人によって，やはり周りの雰囲気とかによって区別をすることも結構ありますので，これもなかなか難しいところがあります。

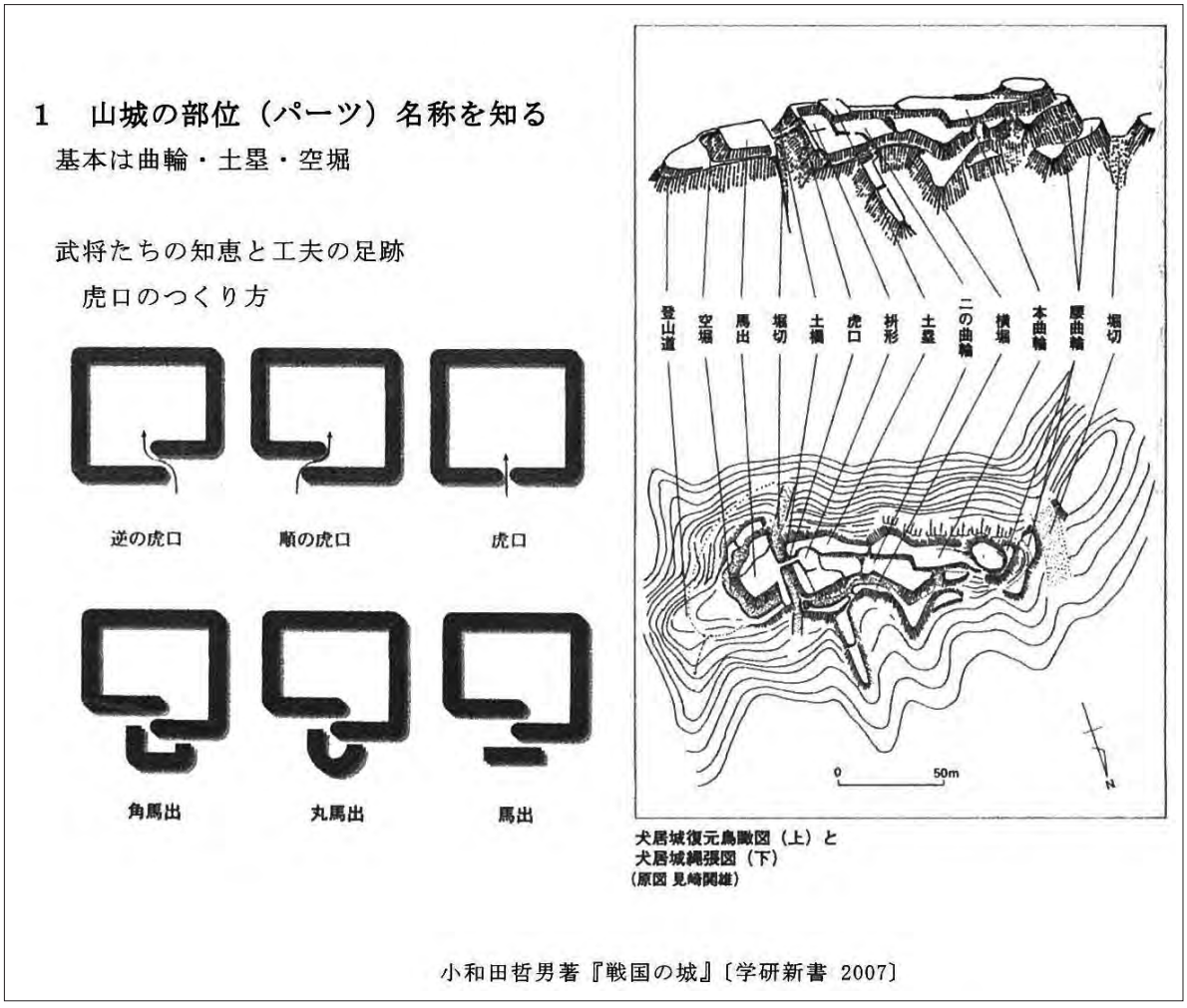
今日は山城の魅力ということですが，まずは山城の部位ですね，パーツ。この名称をしっかり押さえておく必要があるということで，今日の資料にちょっと入れておきました【資料１】。

【資料１】の右側の図は，いわゆる鳥瞰図という言い方をします。いわゆる鳥の目で高い所から山城を見たときの図。それを下で今度は平面に置いた，これは通称「縄張図」という言い方をします。

今日おみえの方は皆さん，お城の専門の方も多いと思うので，いまさらという感じ

があるかもしれませんが，お城というのは，まずは地選ですね。土地を選ぶ。どこに城をつくるか。その次に経始（けいし），これは通称「縄張」という言い方をします。どこに本丸，本曲輪を置くか，どこに二の曲輪を置くか，どこに堀を掘るかという，いわゆる設計ですね。これが経始，いわゆる縄張。その次に普請（ふしん）。普請というのは，いわゆる土木工事。道普請なんていう言葉にも残っています。実際に堀を掘る，あるいは石垣を積むというような作業。そして最後，四つ目が作事（さくじ）。

ですから，お城ができるまでというのは，地選，経始，普請，作事，四つの工程を経なければいけないのですが，だいたい中世の山城は最後の作事，建物は今はないです。中世の山城で，その当時の建物が残っているというのはないですね。ただ，各地で最近，発掘調査に基づいて，いわゆる復元整備が行われています。いろんな所で櫓



【資料１】山城の部位（パーツ）名称を知る

とか城門とか，山城でもそういうのを今は見ることができますが，あれは実は本物ではないですね。

これは，やはり中世となると，今から500年前，600年前ぐらいの感じになってきますので，そのころのものがそのまま，お寺なら少しずつメンテナンスをしながら現在まで残っている建物が多いですが，さすがに山城となりますとそういう建物はないわけです。ただ，やはりイメージとしてこういうものがあったのではないかというところで，地方自治体によっては，それを復元整備ということで造られています。これも，ただやみくもに建物を建てるというのではなくて，要するにある程度の発掘調査をして，こういうものだったというのと，あるいは，これもいわゆる建築史の専門家の方がいろいろ作業として入るのですが，中世の絵巻物，あるいは合戦図屏風といったものを元にしながら，こういったものがあったのではなかろうか，それと発掘の成果と合わせて整備していくというのが結構見ることができるので分かりやすい。

【資料１】の右側の鳥瞰図を見ていただきますと，いわゆる空堀ですね，普通に地面を掘る。そして馬出。この馬出については後でお話ししますが，空堀とは別に堀切という言い方をするんです。今日のお三方の報告にもありましたが空堀。そして土橋があって，そこで渡っていく。虎口，この虎口も後でお話しします。そして，いわゆる枡形。一升枡とか一合枡というときの枡ですね。要するに城に入る所にちょっとした四角い空間がある。それを枡形と言っているわけですが，それと，その右側に土塁。ここでは二の曲輪があって，また横堀が下にあって，本曲輪がちょっと高い所にある。先ほどの最後のご報告の中でも，１郭，２郭，３郭と三つの曲輪があったというお話がありましたが，いわゆる主郭に当たる部分が本曲輪，江戸時代で言えば本丸に当たるわけですよね。そういったところがあって，やや一段下がった所にちょっと平坦地がある。それを腰曲輪という。また堀切がある。だいたいこれが一般的な中世城郭の山城のパーツということになります。

この図に出ていないのでは，例えば先ほどの報告にもありました切岸（きりぎし）。

自然地形をわざわざ少し削って，そこから登れないようにする。崖を削っている。この切岸は，この図には入っていませんでした。

それからもう一つ，竪堀もこの図には入っていません。というのは，これも場所によって，地域によって，それぞれ城は特色が出てくるんですね。今，いろんな所で竪堀は見つかっています。ところが昔といっても，私がまだ若い頃，学生の頃は，竪堀なんていうのはそんなに注目されていなかった。なぜかというと，いわゆる普通の沢と間違えられていたというか，自然に水が流れ込んで溝ができて下に行っているんだとばかり思っていた。ところが城郭研究で越後のほうの研究をされていた方が，これは明らかに人工的なものだということで竪堀という名称で呼ばれるようになった。

これは，どういうわけか日本海側，北陸あるいは山陰側に多いのですが，実は静岡県には竪堀のお城がそんなにありません。ですから，この図にも竪堀は入っていないんです。しかし，場所によっては連続竪堀，畝状竪堀になっていまして，10本，20本，縦に堀が入っているという山城がいっぱい出てきた。これなどは，見方によって，今まで単に自然のものだと思っていたのが，これは人間の手が入ったものだということになってくるので，まだまだそういった意味では新しい発見がある。これも私は山城の魅力の一つだと考えています。

私がよく言うのは，やはり城というのは基本的には，平城の場合は，大名たち領主のいわゆる居館，今で言うと政治的な政務を執る所，ちょうど首相官邸みたいなものとか，各県で言えば県庁に当たるような所が当時の城の役割の一つです。それともう一つ，特に南北朝内乱から戦国の段階になってきますと，戦う城というかたちになってきます。そういう戦う城の側面として，やはりいろんな工夫ですね。敵に簡単には攻め込まれないような仕掛けをいろいろとつくるということが，この時期に発達してくる。

特に発達の顕著なのが，【資料１】の左側に示しました「虎口」です。あるいは馬出などもその一つですが，要するに誰が城を攻めるにしても，やはり城門の近く，城

の入り口，これを通称「虎口」と言っているわけですが，本当は昔は小さな口と書いていたんでしょうね。しかし，いかにも虎の歯牙に例えて，虎の口に入っていくのは大変だということで，虎の口と書いて虎口（こぐち）と読ませた。その，いわゆる城への入り口の防御，これを私は知恵と工夫の足跡というかたちで言っているのですが，それがよく分かる。

私はよく言うのですが，例えば今から400年前，500年前のものとなると，普通はそれこそ博物館でガラスケース越しにしか見られないんですよね。だけどお城は，実際にそこをじかに自分で触れるし，もちろん歩けるしということで，本当に400年前，500年前を体感できる。これが山城の魅力の一つだと考えているのですが，その中で，やはり誰がどういうところに，どういう手を加えて守りを固めていたか，これが虎口などを見ることによってよく分かる。

虎口とセットになるのが枡形ですよね。今日のご報告の最後の伊藤さんの図で，３郭から道を通って上へ上がっていく。そこに石垣があって，こちらへ入っていくという，その画面を見せていただいた時，ここはやはりこのお城の虎口だなと思いましたが，これはそこの守りを固めるということで，あえて石なども積んだ。これが15世紀初めか14世紀の終わりというのはちょっとびっくりしましたが，そういったかたちで，かなり早くからいろんな知恵と工夫の足跡を見ることができるということではないかと思います。

一般的には虎口は三つございまして，いわゆる「平虎口」みたいなかたちで何もなくて，そのまま土塁と堀があって，そこに門があるぐらいのもの。

【資料１】の左側の図の真ん中が，いわゆる「順の虎口」という言い方をしていますが，これは何かというと，人が直進して右へ曲がって中に入っていく。右へ曲がるというのがみそなんですね。なぜかというと，今もだいたいそうですが，人間は右利きの方が多い。そうすると，刀を持つ手はだいたい右ですから，左の肩が空くんです。そこを，城内から弓矢とか，場合によっては鉄砲で撃ってくる。敵が右利きだと，左

側まで払うのは難しいということで，あえて虎口は右に曲がるように造られている，だいたい順の虎口と言われるのは右へ折れて入っていくようになっています。

それに対して，図の左側にあげたのが「逆の虎口」で，左に曲がって中に入っていく入り口です。これは地形によって制約された場合が多かったと思うんですが，基本的には順の虎口が優先されるのですが，地形によっては左に折れて入っていく逆の虎口もあります。

ですから，そういう目でいろいろ山城を見て，例えば二の曲輪から本曲輪に入るとき，どう斜めに入っていくか，どう登っていくかというのを見る。そういう楽しみ方もあると思います。

少し発達してくると，単なる虎口だけではなくて，その前に遮蔽物を置く。これがいわゆる「馬出」といわれるものです（【資料１】の左側下段）。真っすぐの１本の土塁や堀だと普通の馬出（図の右側）ですが，それを半円形に，三日月型に回しているのが「丸馬出」（図の真ん中），それを四角くしているのは「角馬出」（図の左側）というかたちで，幾つかのパターンが出てくるわけです。

こちら広島県ではどうなのか，私もそこまで詳しくは追いかけていませんが，例えば甲信越の方に行きますと，今の山梨県あるいは武田が支配していた地域では，結構，「丸馬出」が多いんですよね。馬出を丸く外に築いている。それは，いわゆる武田信玄流というか武田流の築城術ということで，いろいろ大名によって防御の考え方，あるいはそれを実際に城に残す，城としてつくる，築く，これが大名ごとに知恵がそれぞれあるんですね。

武田の今申しました「丸馬出」というのは，ご承知の方もいらっしゃるかもしれません，武田の軍師として山本勘助。ここで歴史に詳しい方には，山本勘助は本当にいたの？　と言われるかもしれませんので，少し補足をしておきます。確かに今から50年ぐらい前までは，山本勘助は研究者の間では，いわゆる非実在説。武田信玄の軍師として有名な山本勘助，確かに小説か映画では有名だけれども，あれは実在しないと

いうのが当時の研究の通説でした。昔の歴史人名辞典などで山本勘助を引くと「武田信玄の軍師と言われている。しかし実在は不明」とか，中には「実在していない」と断言しているものもあります。

その時代からだいぶたって，山本勘助が復権したのは，実はそんなに古いことではないんです。昭和44年（1969年）にＮＨＫの大河ドラマで『天と地と』というのが放送されました。今日おみえのご高齢の方は見ていた方もいらっしゃると思います。上杉謙信と武田信玄の川中島の戦いをメインにしたドラマだったのですが，そのテレビに武田信玄の文書がアップで映ったんですね。それをたまたま北海道の釧路でご覧になっていた，地元の郵便局長さんである市川良一さんは，うちに同じのがあったというので家探しをしたら，文書が出てきた。

しかし読めない。普通の人は，ミミズののたくったような字は読めない。しようがないので，近くの釧路市立図書館に持ち込んで見てもらった。しかし，図書館の司書の方も読めないので困ったということで，それを写真に撮って東京大学の史料編纂所に送って見てもらったら，確かに武田信玄の文書だと判った。

それぐらいで終わったら，たぶん北海道新聞か何かの片隅に，北海道でも武田信玄の文書が一通見つかりましたぐらいで終わっていたと思うのですが，なんとこの文書は，こちらではあまり大きなニュースにはならなかったと思いますが，山梨とか長野では一面トップですよ。山梨日日と信濃毎日は一面トップで扱った。それはなぜか。山本勘助実在の証拠が書かれていたのです。その文書の一番最後の行に「詳しいことは山本勘助が申し伝える」という一文が入っていて，それで初めて確かな史料に山本勘助の名前が出てきたから実在したということが明らかになったのです。

それに関わって，『甲陽軍鑑』という本の名前をご承知かもしれません。昨年の11月ごろ，確かＮＨＫの『歴史秘話ヒストリア』でもやりました。私もちょこっと顔を出したのですが，その『甲陽軍鑑』というのは，言ってみれば武田信玄一代記のような本で，昭和44年（1969年）ごろまでは『甲陽軍鑑』は偽書だよ，なぜかといえば実

在しない山本勘助が活躍するシーンがいっぱい出てきているから，あれは信用しないほうがいいよと言われていた。私なども先輩から，『甲陽軍鑑』なんか使って論文を書いちゃ駄目だよと言われてきました。

しかし，その『甲陽軍鑑』も今は復権です。要するに，山本勘助の活躍するシーンがいっぱい出てきているから，あの本は嘘だ，偽書だと言われたのが，いや，そうでもないと。私は今「そうでもない」という言い方をしたのは，やはり全面的には信用できないんですね。武田信玄を持ち上げるために書いた本ですから，全部が全部信用はできないんですが，それでも幾つかの部分，ほかの史料である程度裏付けが取れるようなところは信用できると，今はそういう研究スタイルになってきました。

その『甲陽軍鑑』の中に，山本勘助の城取りがあります。城取りと言っても，城を取るのではなくて，築城術のことを昔は城取りと言いました。その城取りの武田軍団におけるトップが山本勘助だったんですね。ですから今，私どもは，武田流築城術という言い方と，勘助流築城術という言い方と両方しています。

その『甲陽軍鑑』の中には，武田信玄が山本勘助に城をつくるときの要点を言ってみろというかたちで言わせており，その中では「城取りの眼（まなこ）と申すは，この馬出にある」という言い方をしているんですね。その馬出は，武田信玄の場合，半月状というか三日月状につくる。それで，よく三日月堀なんていう堀が，どういうわけか信玄の本拠地の山梨県にはあまりないんですが，武田軍が外へ出て行って新しくお城をつくった所には，その三日月堀がいっぱいあるということで，武田流の築城術というのがそこで分かる。

そしてもう一つ。こちらの広島県では，そういう遺構が出てきているかどうか私も承知していないのですが，関東にはいわゆる障子堀と呼ばれる堀を掘り残して障子の桟のような形にした堀があります。これを通称「障子堀」と言っているんです。これは何かというと，先ほどの最後の伊藤さんの報告で，堀底道，堀を道に使ったと言っていましたが，そのように堀が道に使われないように，わざと障子の桟のように残し

ていく。これを障子堀という言い方をしているんですね。

一番有名なのは，今，静岡県の三島市にございます山中城。豊臣秀吉が小田原攻めの時に最初に落とした城です。これは今，国の史跡になっていまして，発掘調査も整備も全面的に進んで，山城の魅力がよく分かるいいお城なんです。もしあちらのほうへ行く機会があったら，ぜひ寄っていただきたいのですが，その山中城に障子堀がよく残っている。この障子堀は，いわゆる北条流の築城術の特徴です。

今から５～６年前でしたが，若い女性たちを連れて城を案内した時，今の若い女性は障子というのを知らないんですね。ちょっとびっくりしました。「障子ってなあに？」と。「こういうもので，部屋の境に立てるんだよ」と言っても，よく分からない。それで現場を見たら，「なんだ，ワッフル堀か」と（笑）。これには私も唖然としました。彼女たちにしてみるとワッフルなんですね。ですから，これからは障子堀というよりか，ワッフル堀といって説明したほうが若い子には分かりやすいのかななんて思いましたが。そういう築城術が大名ごとで発達していく流れがあるんですね。

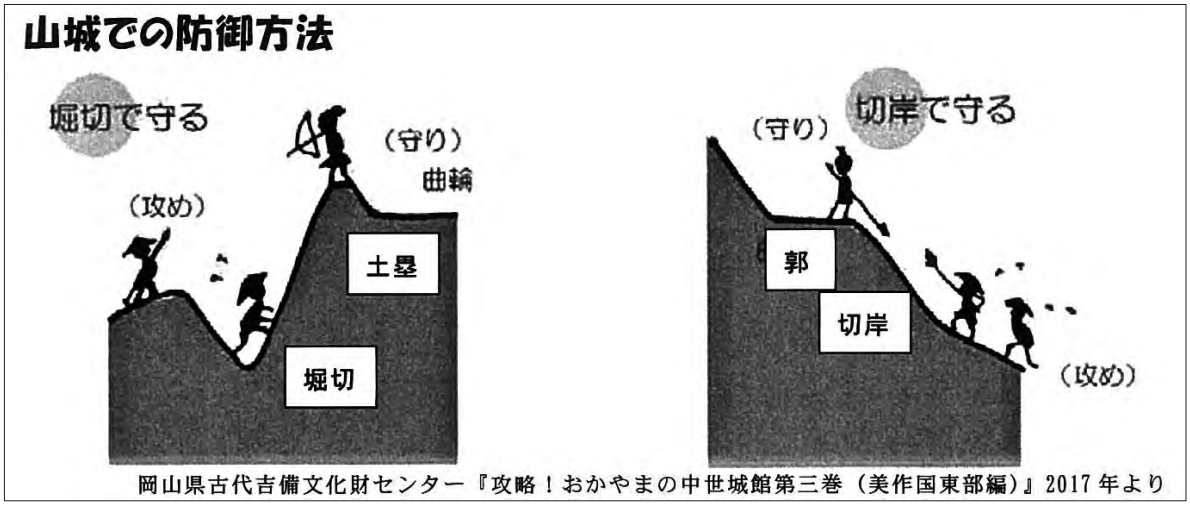
それともう一つ。お城というのは，やはり攻めるほうは必死になって攻めます。なぜ落とせないのかということを，城攻めの時に体験するわけですよね。そうすると，そのなかなか落とせない仕掛け，これはいいぞ，まねようということで，城攻めがたくさん繰り広げられるにつれて，今度はその城を落とした後，いいところは自分の築城術に取り入れていく。これが結構，お城の技術というか築城術が全国的に展開していく大きな要因の一つだというふうに私は考えているんですね。

先ほど名前を出しました豊臣秀吉が天正18年（1590年）に小田原城を攻めます。その小田原城を攻めた時に，北条側が頼りにしたのは，いわゆる「惣（総）構え」という言い方をします。惣村の「惣」という字を書く場合もあるし，すべての「総」という字を書くこともある。その惣構え，これは何かというと，お城の主郭部分だけではなくて，城下町まで全部取り囲んだ大きな城壁というか，堀と土塁で囲んでいます。小田原城の場合は，巡り９㎞と言っています。今は平地の部分はほとんど削られてい

たり住宅地になっていたりして見られないのですが，山のほうには，惣構えの遺構がいまだに残っています。

今日の資料集の一番最後の所にありますが，この山城で「堀切で守る」という図（【参考図１】）がありますね。この堀，約10ｍ掘るんです。そうすると，その掘った土を上に盛り上げると，これが土塁になる。土塁にすると，高さ10ｍとはいかないんですが，堀底から土塁の上まで15ｍぐらいのすごい落差が出る。だから，そこから簡単に登るということはできなくて，当時，秀吉軍，21万とも22万とも言われる大軍で，４月３日から城攻めを始めましたが，３カ月たっても落ちない。普通，20万を超える大軍で一つのお城を攻めて３カ月落ちないというのは考えられません。だけど実際，北条の場合は，城内には２万か３万ぐらいの兵はいたと思いますが，相手は20万ですから10倍の敵ですが，それを守り切る。

最終的には，これは私が時代考証をやりました例の『軍師官兵衛』の時，黒田官兵衛が一人説得に入っていって，城主の北条氏直に，もうこれ以上抵抗しても無駄ですよと引導を突きつけて開城に持ち込んだ。つまり力攻めでは落とせなかった。それを秀吉が強く感じまして，この惣構えはいいぞということで，今度は自分がつくっている大坂城に惣構えをつくらせている。その惣構えをなかなか落とせなかったというのが，例の『真田丸』で有名になった，大坂城の惣構えの外に真田，あのドラマでは真



岡山県古代吉備文化財センター『攻略！おかやまの中世城館第三巻（美作国東部編）』2017年より

【参考図１】山城での防御方法（当日配布の資料集Ｐ25より）

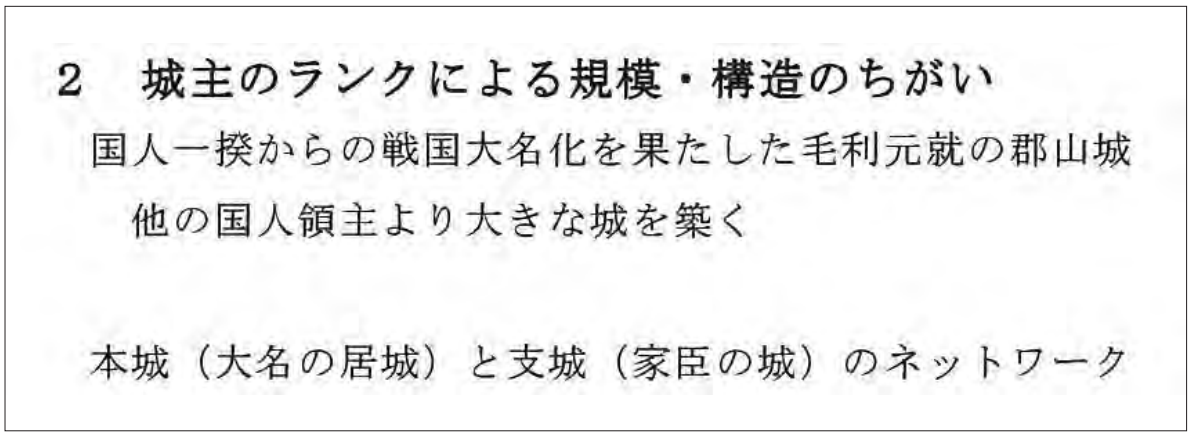
田幸村ではなくて真田信繁という名前で放送したわけですが，そういったことがあった。

要するに築城術は，ある程度いいところはほかの武将たちもまねていきますので，さらに言ってみれば磨きがかかる，ブラッシュアップされる。ですから，だんだん落ちない，なかなか落とせない城ができていくということになるわけです。

さて，【資料２】に入ってまいります。そうした城を追いかけていくときに，私はやはり城主のランクによる規模・構造の違いというものに一つ注目して見ていく必要があると考えているところなんです。これはどういうことかと言いますと，毛利元就を一つ例に取り上げます。ご承知のとおり毛利元就というのは，もともとは3,000貫文ぐらいのいわゆる国人領主ですよね。

最近，若い人たちは国衆という言い方をするようになってきました。国人領主＝国衆でいいのですが，だいたいは鎌倉時代の地頭の系譜を引くような武士，これが室町・戦国の頃になって，いわゆる国人領主あるいは国衆と言われるようになり，だいたいどこの国にも，国の規模の大きさにもよりますが，15人や20人はいます。そういう連中は，守護とは違うんですね。守護は室町将軍家から守護として任命された領主です。

私は戦国大名化の成り立ちには三つのコースがあるとよく言います。一つは，例の鎌倉時代の守護がそのまま室町時代の守護になる。それが途中から守護大名になり，



【資料２】城主のランクによる規模・構造のちがい

さらに戦国大名に，要するにホップ・ステップ・ジャンプで守護から戦国大名化したという家はたくさんある。私の住んでいる静岡の今川はそうだし，お隣の山梨県の武田もそうだし，こちらのほうに近い所で言えば，豊後の大友とか薩摩の島津などは，みんなもともとの守護から戦国大名。お隣山口の大内もそうですね。大内は途中，下剋上で滅ぼされてしまいましたが，そういったかたちで守護大名，戦国大名と，そのままストレートにいったケース。

そしてもう一つは，守護代，守護の筆頭家老が下剋上によって守護を倒して自分が戦国大名になっていったケース。この近くで言えば，それこそ山陰の月山富田城の尼子はその一番典型例。出雲の守護は京極というのがいましたが，その守護代だったのが尼子。その経久の時に守護を倒して，自らが戦国大名にのし上がっていったのです。北近江のほうの浅井は後で触れますが，国人領主ですから守護代ではない。守護代は上坂（こうさか）という人がいたのですが，それとはまた別です。

同じような例は，越後，今の新潟ですね。上杉家のもともとは長尾と言いました。上杉謙信は，もともと長尾景虎。これが，お父さんである長尾為景の時に守護の上杉を倒して下剋上で戦国大名化した。それで，景虎の時に上杉の名跡をもらって長尾から上杉になっただけなので，これもそれこそ下剋上の典型ということになります。これが二つ目のコース。

三つ目のコースが，今日お話しします毛利のような国人一揆からの戦国大名化ということになります。その毛利の場合は，安芸の国には武田という銀山城（かなやまじょう）の城主だった領主が守護でいたわけですが，その銀山城の武田はそんなに力量がなくて，国人領主が15人ぐらいいました。それがだんだん手を結ぶようになり，いわゆる国人一揆を結ぶようになる。

一揆というと皆さん，江戸時代の百姓一揆，中世の土一揆を連想して，百姓一揆などに典型的なように一般庶民が鍬（くわ）や鎌を手に持って武装蜂起をしたと考えられるかもしれませんが，あれは「一」と「揆」の間にレ点を入れて「揆を一にする」

と読むんですね。揆というのは謀（はかりごと）ですから，言ってみれば守護を倒すために一緒にみんな手をつなごうよ，これが国人一揆なんです。本来は，みんなが手を結んで対等だったんですね。言ってみればどんぐりの背比べ。

では，なぜ毛利元就が一歩頭を上に出したかというと，実は私は二つ要因があると思います。一つは，この毛利元就が，これも皆さんご承知のことですが，最初，自分の三男の隆景を小早川家に養子に入れて押し込む。そしてその後，次男の元春をやはり吉川家に養子で押し込む。小早川家は瀬戸内に面しており，吉川は山のほうと。当時は山といっても，いわゆる鉄がいっぱい採れる。まさに鉄は国を富ます大きな力ですから，瀬戸内のいわゆる航海圏といいますか，そういう商品流通と鉄を押さえる。しかも１＋１＋１で３になります。ほかの連中は，例えば天野とか熊谷とか，先ほどもちょっと名前が出てきた阿曽沼とか，そういった国人領主はみんな１なんですね。１のまんま。

もう一つ，毛利元就のすごいのは，自分の娘を宍戸家に嫁に入れている。宍戸隆家。そうすると，１＋１＋１で，お嫁さんに行ったんだから１にはカウントできないにしても0.5はある。だから3.5。ほかの連中が１のまんまの時に，もう3.5の力を持ったわけで，どんぐりの背比べ状態から頭一つ抜け出すことができた。これが一つ。

それからもう一つは，今日のお城の話に関わってくるんですが，それこそ郡山城をほかの連中の城よりも大きなお城としてつくる，これが決定的なんですね。これによってほかの連中が，あの毛利元就様にはかなわないわという感じで，だんだんそれに組み込まれていく。だから，国人一揆を結んでいたほかの連中たちは，自分の仲間だと思っているうちに，いつの間にか毛利が自分たちの殿様になっちゃったという，そんな感覚を持ったんだと思います。

それと全く同じことが北近江の先ほど名前を出した浅井です。普通は皆さん，あれは「あさい」と読んでいたと思うんですが，私はあの辺りの研究をやったことがあって，地元ではみんな「あざい」と発音している。道路標識にも「AZAI」だから，あ

れは絶対に「あざい」だということで，私が一番最初にやったＮＨＫの大河ドラマは1996年の『秀吉』だったのですが，その時から「あざい」と発音してもらうようにしています。

それとついでに言うと，先ほど「あまご」と私は発音しました尼子経久，あれも昔は皆さん「あまこ」。私も子どもの頃，尼子十勇士なんていう言葉で覚えていたので。ところが，尼子の出身地である今の滋賀県の彦根のほうに近江鉄道という電車が通っていまして，私は何気なく乗っていて，そこで降りるつもりではなかったんですが，駅の看板にひらがなで「あまご」と書いてあるのを見て,「おっ」と思ってすぐに降りた。そして，駅員の人に「これ，あまこじゃないんですか」と言ったら，「いや，あまごだよ，この辺りはあまごっていう村だよ」というので「あまご」が正しいんだということで，テレビでも「あまご」と発音するようにしています。ちょっと余談ですが。

そういったわけで，この浅井の場合も国人一揆なんです。守護は京極です。さっきの尼子と同じで，北近江と出雲の守護，あと飛騨の守護も兼ねていたんですが，その京極がいて，守護代が上坂。これがちょっと生意気な立場で，ほかの国人たちがみんな頭にきて，あいつにはついて行きたくないというので手を結んだのが北近江の浅井たちなんですね。

それで，その国人一揆を結んで，みんながほぼ対等な立場だった時に，その初代に当たります浅井亮政（すけまさ），これは例の有名な浅井長政のおじいさん，この浅井亮政が小谷城というすごく大きなお城をつくっちゃった。これによって，ほかの同じ国人仲間が浅井亮政様にはかなわないわということで，文字通り，兜を脱いでくるという。

そんなかたちになりますので，やはり戦国大名化の過程で，特にこの毛利元就の場合にも顕著ですが，郡山城というばかでかい，ほかの武将たちはまねができない，そういう大きなお城をつくることによって戦国大名化に成功していったという例があり

ます。ですから【資料２】にも書きましたが，他の国人領主より大きな城を築くということが戦国大名化のステップになっていったということになります。

次に本城ですね，大名の居城の本城と家臣の支城，これがネットワークで結ばれる。これは実は山城を追いかけていくときに，二つの系統があるということは，ある程度，承知しておくと，訪ねる時の参考になると思うのですが，一つはもともとそこにいた，いわゆる国人領主クラスなら国人領主のお城，それがその地の戦国大名がだんだん大きくなって傘下に組み込まれていった時に，そのまま家臣になり，その殿様から今までいたお城をそのまま守っていいよということで，そのまま城主としての地位を約束された場合。

それともう一つは，抵抗しまして，徹底抗戦して最後に滅ぼされてしまう。滅ぼされた時に，そこを滅ぼした大名が，このお城はなかなかいいなと思ったときには，その城を廃城にしないんです。壊さない。どうしたかというと，自分の部下にその城を任せる，守らせるということになります。

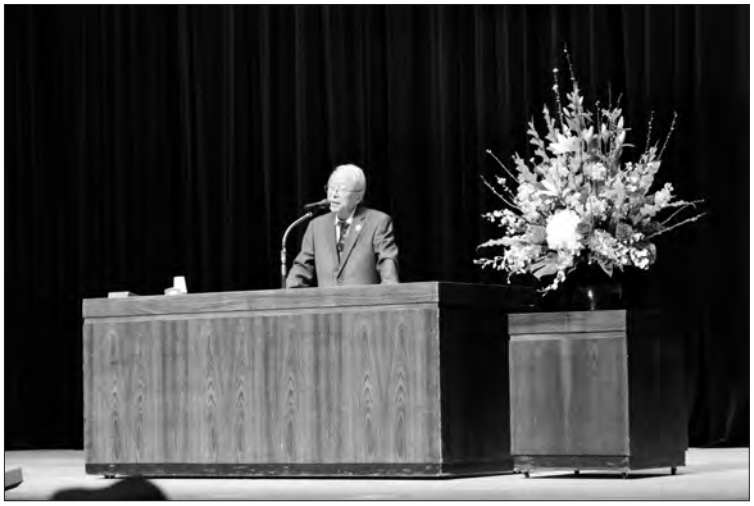
ですから，その戦国大名の支城は大きく二つに分かれるんですね。もともと国人領主クラスの城だったところは，その国人領主がそのまま家臣になれば，そこを任される。だけど，抵抗して滅ぼされると，新しい別な全く関係ないところから武将が送り込まれてきて，そこの城主になるという場合もある。いろんなかたちでケース・バイ・ケースということになるんですが，山城を見ていくときに，そういった歴史もある程度知っていると，ここはこういういきさつがあったのかというのがあって，それでさらにいろんな遺構を見る目が養われていくということになります。

そしてもう一つ，これは私自身がかねがね注目しているのですが，要するに規模構造の違いという言い方をするときに，今日の報告でも，曲輪が１列につながるという連郭式と，あと，これは近世城郭，平城に多いのですが，輪郭式と言いまして，真ん中に本丸，本曲輪があって，その周りを二の曲輪が取り巻き，さらにその周りを三の曲輪が取り巻くというもの。それは，やはり平地で，自分の思いどおりのプランで城

ができるからですが，だけど山城はそうじゃない。地形に制約されます。その地形に制約されるというときに，やはりポイントになるのが，今日，先ほど，お城づくりのプロセスで，まずは地選という言い方をしましたね。土地を選ぶ。だからお城を築くときに，例えばどの山を使うか，これは本当にポイントです。もちろん戦国大名本人が，ここがいいよというふうに考えて言う場合もあっただろうし，当時まだ城づくりのプロというのはいませんが，後のいわゆる軍師と言われるような人たち，地形にも詳しいような人たちが選んできて，実際にそこに殿様を連れて行き，ここに城をつくったらどうでしょうかということで，重臣クラスがそこに集まり，ここにしようと決めていった場合もある。そのように幾つかのパターンはあると思いますが，やはり山城ですから地形に制約される。その地形をどううまく使うかということは，それこそ城づくりの一番のポイントになりますね。

そこで，だいたいは山の頂上部分が本曲輪，段々が下がってくるに従って，低くなって二の曲輪，三の曲輪ということになっていくのが多いのですが，その場合，本曲輪の部分がちょっと狭いなというと，やはり少し山を掘り下げて広げて曲輪を設ける。例えば，堀を掘ったときに，さっき言ったように掘った土を土盛りして土塁をつくっていく。

よくお城の概説書の最初のほうに，「城」という字はということで，「土」という字に「成る」という字からなっていると書かれていることが多い。「成る」という字は下に「皿」という字を付けて「盛る」と読みますので，土を盛る，これが本当のお城の一番の原型ですね。最初のスタイル。これは人間対人間



講演風景

の戦いのときより前に，例えば縄文時代の頃に，既に環濠集落のようなかたちで，例えばイノシシとか野獣から自分たちの集落を守るために集落の周りに堀を掘る。これがおそらく城の一番最初の原初形態だと思いますが，それにどんどん工夫が加えられて山城になっていくわけで，そういったときに，いわゆる山上部分をうまく切る。

そして多いのが，たぶんこの広島県にも多いと思うんですが，いわゆる舌状台地という言い方をします。舌状の舌は「べろ」の舌を書きますが，つまり山の上そのものではなくて，山から出てくるような尾根を幾つか途中で堀を切って，後から来る敵をそこで防ぐ。そして，前のほうにいろんな堀とか土塁とかを設けていくという台地城郭のようなものも結構多いと思うんです。そういったものが，この築城プラン，それこそ先ほど言いました経始，縄張に密接に関係してくる。

ですから，築城の何％，どのぐらいの力を入れたかは分かりませんが，城の場所を選ぶということと，そこにどういう縄張をするかということが，かなり当時の武将たちにとっては大事だったということになる。その場合，私がよく言うのは，複濠複郭と言いまして，幾つかの曲輪がある山城。そういう城ができるのは，いわゆるランクでいうと国人領主レベル以上です。一方，単濠単郭と言いまして，要するに本曲輪なら本曲輪，それだけで，周りをちょっと堀とか土塁が囲むぐらいの山城，こうしたいわゆる単濠単郭の城というのは，土豪，地侍のお城です。

国人領主と土豪，地侍は，武士としてはランクに大きな違いがあるんですね。先ほど言いましたように国人領主というのは，もともと鎌倉以来の地頭クラスがそのまま土着して武士として生き延びた。彼らは，いわゆる専業武士です。武士専門です。一方，土豪，地侍というのはどういう人たちかというと，いわゆる村落にいる，言ってみれば有力農民ですね。名主クラス。彼らが，普段は農業経営を行っていながら，いざ戦いというときには，それこそ戦う武器を持って，甲冑に身を固めて戦いに出ていく。

有名なところでは一領具足という言い方があります。一領具足というと，多くの方

は，例の土佐の長宗我部の一領具足が有名なので，長宗我部の専売特許みたいに思われていますが，そうではない。だいたいどこの大名家でも，つまり信長・秀吉が出てくる前の戦国大名家臣団というのは，いわゆる専業武士はそんなにいない。むしろ普段は村々に住んでいて，いざというときに戦いに出て行くという，半分農民で半分武士なものですから半農半士，あるいは兵農未分離という言い方をしています。兵と農が混ざり合っている。彼らの中から，そのまま武士化していったものと，そのまま農民になって残ったのと両方に分かれていくのが兵農分離。ちょうど信長の終わりごろから秀吉の時代にかけてが，その時期にあたります。ですから，それ以前の土豪クラス，地侍とも言いますが，彼らは小さいながら城を持っているんです。

これは，広島県をあらかじめ調べてくればよかったんですが，県ごとに中世城館跡の分布調査，悉皆調査というのをしたことがあって，私も静岡県の責任者でやりましたが，調べたら，静岡県だけで中世城館跡が760ありました。今はちょっと増えて800を超えるんですが，確かその時の報告だと滋賀県が1,300ぐらい，四国の愛媛県も1,300ぐらいあったと思います。広島も1,000ぐらいあったんじゃないかなと思うんですが，とにかくすごい数の中世城館跡がある。

それは何を隠そう，小さな土豪の，例えば50ｍ四方のちょっと堀に囲まれたものも一つの城としてカウントしています。そういうところに城主としていて，いざ戦いの時には，たぶん自分の小作人ですね，いわゆる小作料を免除してやるから，俺が戦いに出て行くときには，おまえは槍持とか馬のくつわ取りで来い，旗持ちで来いといったかたちで，１人の豪族が10人ぐらいの家臣を連れて戦いに出て行く。

面白いのは，これは広島県にその例があるかどうか，私はちょっと存じ上げてないんですが，面白い例があるんです。それこそ支城ネットワークとも関連するんですが，ある一つの支城で城主が，兵を集める合図に鐘・太鼓・ほら貝などを使っている例です。

まずお城でカンカンカンと鐘が鳴った。そうすると，農作業をやっていた半農半士

の武士でもある農民でもある彼らが，戦いが近いぞということでちょっと緊張する。その次に太鼓が鳴る。これはもう戦争がある，合戦があるなということで，すぐ家へ戻る。そのうちに，ほら貝が鳴る。戦いが近いぞということで，すぐ兵糧米の用意をするんですね。

３日分の腰兵糧という言葉を聞いたことがありますか。戦いに出て行くときに兵士たちは３日分の食べ物は自分で用意するのが建前でした。４日目からは向こうでいろいろ炊事したりして出す。３日分は腰兵糧ということで各自が腰に巻いて出てくる。例えばおにぎりなんかだと，夏だと３日目には腐っちゃうと思うので，これは面白い知恵があって，確か毛利元就は餅を持参させています。お餅だと腐らないということでしょうか，いずれにしても，３日分の兵糧は自前で準備しろということが原則でした。

そして城から鐘・太鼓・ほら貝が一斉に鳴ると，戦いだということでみんなお城に集まってくる。これで一つの軍団ができる。ということは，そのお城の音が伝わる範囲，それが当時の主従関係で重要になる。ですから，それだけお城がたくさんあったということになります。鐘の音は５～６㎞以上聞こえます。ただ，太鼓の音は５～６㎞離れると聞こえないんですよね。ほら貝もそんなに聞こえない。だから，せいぜい４㎞ぐらいの所に一つお城がないと，鐘・太鼓・ほら貝による召集が難しいということになる。ということは，それだけいろんな所にお城があったということにもなる。そんなところにも中世の山城がいかに多かったかという理由があります。それと合わせて，いわゆる狼煙（のろし）ですね。各地に狼煙台が残っていますし，発掘調査もだいぶ進んでいます。普通，狼煙というと「狼」の「煙」と書くので狼のふんを燃やしたと言われていますが，私がいろんな狼煙台の発掘調査報告書を読んでいると，狼のふんが出てきたという所は見たことがない。

ですから，これはあくまで中国から伝わってきた時の漢字で，向こうでは確かに狼のふんを燃やしたのかもしれませんが，日本にはそんなに狼がいなかったのではない

かとも思うし，この辺はまだ自信はありません。だいたいは，もみ殻などを燃やして煙を出すというのが多くて，実際，狼煙台の発掘調査の現場から焦げたもみ殻が出てきたというのもあります。ですから，そういったものは実際はそういうかたちでやったと思うんですね。

ただ，やはり狼煙だと雨の日とか曇りの日はちょっと駄目だと思うんですね。見えないと思う。だから，それを補完する意味で，さっき言った音による伝達手段も併用したのかなと思いますし，農作業をやっている人がしょっちゅうお城の方を見て，いつ狼煙が上がるかを見ているわけにはいかないので，やはりそういった意味では音が結構大きな意味を持ったのかもしれないなというふうに思っております。

さて，【資料３】に入ります。「合戦史から山城を読み解く」ということです。私ども戦国史を研究していく中で，いわゆる文献資料ですね。よく一級史料，二級史料，三級史料なんて言い方をしますが，やはり一番は当時の人が書いたものが一番信憑性は高いわけですよね。後の人が想像で書いたようなものは，だんだん史料的な信憑性は低くなるんですが，ここがなかなか難しくて，これは私もちょっとびっくりした例があるんです。

比叡山延暦寺，これはご承知のとおり，織田信長が元亀２年（1571年）９月13日，叡山焼き討ちというのをやります。これまでのいろんなドラマなどでは，信長が「比叡山を焼き討ちするぞ」と言った時に，明智光秀が「いや，あそこは鎮護国家の道場ですのでおやめください」と言って止めたことになっているんですが，これは今から10年以上前，比叡山延暦寺のふもとの坂本を含んだ『大津市史』という市の歴史を編纂したもの，その資料編の時に見つかったものには，光秀はむしろ率先して焼いていったみたいなかたちで書かれていたんです。ですから，たぶん来年の大河ドラマでは「殿，おやめください」と止めるシーンはなくなるのではないかと思うんですけどね。むしろ光秀が積極的に焼いた可能性はある。

その比叡山延暦寺の発掘をしている人と，たまたまある研究会で一緒になって飲ん

だことがあるんですが，その時に，最初は「いや，先生おかしいんですよ。いろんな所を掘ってるんだけど，そんな焼けた痕跡がないんですよ」と言っていた。それで何年か後に，また同じ研究会で会った時，「これはやっぱり文献に書かれていることが間違いではないでしょうか。掘っている立場からすると，そう考えざるを得ないんで

3　合戦史から山城を読み解く

文献資料と遺構の関係

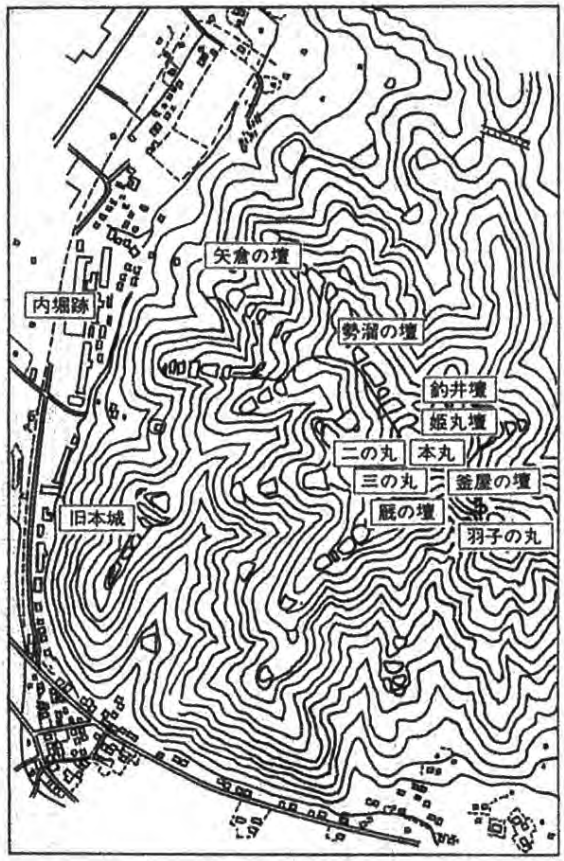
籠城＝敗北ではなかった

郡山城の戦い　　天文９年（1540）～10 年

●尼子晴久 vs ○毛利元就

第１次月山富田城の戦い　　天文 11 年（1542）～12 年

●大内義隆 vs ○尼子晴久



郡山城跡全図

(『日本城郭大系』所収図より)

小和田哲男著『毛利元就　知将の戦略・戦術』〔知的生き方文庫 1996〕

【資料３】合戦史から山城を読み解く

すが」と言われて，持っていった杯をちょっと落としそうになったんですが，そうなんです。発掘担当者いわく，ここは焼かれているはずの建物があった所なのに，掘っても焼けた痕跡がない。

実は比叡山延暦寺の焼き討ちというのは，有名な山科言継というお公家さんが書いた『言継卿記』という本に詳しく書いてある。これは今は活字になっていますから誰でも読めますが，その『言継卿記』の比叡山延暦寺の焼き討ちがあった元亀２年９月13日，14日の所を見ると，今日，信長が朝，比叡山延暦寺に兵をのぼせて，堂塔伽藍500，全部に火をかけた。で，その境内にいた僧俗男女3,000人が殺されたと書いてある。私どもは，その当時のお公家さんが書いた日記ですから，これはもう絶対だと思って，信長の蛮行ということで，ずっと語ってきたんですね。ところが，発掘調査の担当者いわく，いや，そんなに焼けてないんですよと。

そこで私なりに考えた一つの結論。要するに，山科言継は現場で信長が焼き討ちしているのを見たわけじゃないんですね。ここがみそです。史料を読むとき，やはりそこから私の考えもちょっと変わりました。それまでは，当時の人が書いたから書かれていること全部100％正しいと思っていたのが，意外と落とし穴があるなと思いました。

なぜか。要するに山科言継は京都にいるんですよ。京都から比叡山は見えますから，火が上がって，天を焦がすような真っ赤な火が昇っているのを見て，比叡山は焼かれたなというのは見たと思います。そのうちにうわさが入ってくる。今朝，信長軍が攻め登って，500ある建物に全部火をかけたそうだ。2,000～3,000人の人が僧俗男女殺されたそうだ。その「そうだ」というううわさを書かなかった。「そうだ」という記述はなくて，いかにも自分が見たように書いちゃったもんで，比叡山延暦寺の大虐殺が後世に残っちゃった。

そのように考えると，文献資料，一次史料というか一級史料に書かれているからといって，そのままに信用するのはちょっと危ないなと。むしろ，先ほど言った考古学

者の考古学的な発掘の人の証言のほうが，この場合は正しいのかなと思っていきますと，そういった意味では，そういう文献資料に出てくるから，それをそのまま鵜呑みにするのではなく，やはり実際に掘っている人の証言と突き合わせて見ていく必要があるというふうに私は考えているところなんです。

その点で，冒頭に時代考証の裏話的なお話をしましたが，その小谷城の落城場面は文献的にも考古学的にも焼けていないというわけですので，あの場合は確かに焼けていないというのが正しいと思うわけで，これからいろんなところでまだまだ発掘調査が進むと思いますので，この広島県でもそういう新しい歴史的な事実が浮かび上がってくるのではないかと思います。

さて，【資料３】の二番目「籠城＝敗北ではなかった」という所をお話したいと思います。私ども，お城研究をしていて，いろんな軍記物を読みますが，だいたい軍記物というのは江戸時代になって書かれるんですね。戦いがなくなった後，戦いがあった頃をしのんでというか，思い出して，もちろん戦国経験者も書いたりします。しかし，むしろ話だけでつながっていくというのも，このころから出てくるんですね。ですから，軍記物はそのままそのとおりには読まないほうがいいというのが私の一つの結論なんですが。

ただ，そうとは言いながら，私がよく言うのは，普通，だいたいのイメージとして籠城すると負けると思われている。多くの方はそれが当たり前だと思うのでしょうけれども，そうだとすると，なぜ負けると分かっていた籠城戦に入っていったのかというのが読めない。ということは，これは要するに，秀吉が城攻めを得意としていろんな城を落としていった，そのイメージが強いからではないかと思います。

秀吉は本当に完全に狙った城はだいたい落としていますね。しかし，それ以前は，むしろ籠城して勝ったというケースが多いんです。そうでなければ，誰も好き好んで籠城はしなかったと思います。では，その籠城して勝った戦いを振り返ると，また山城の意味というのが見えてくるということにもなりますので，今日ここでは，籠城＝

敗北ではなかったという二つの事例を紹介しながら話を進めてまいりたいと思います。

まず最初は，例の郡山城の戦いです。これは天文９年から10年にかけて尼子晴久が毛利元就の郡山城を攻めた時。これは去年の何月でしたか，ＮＨＫのＢＳプレミアムの『英雄たちの選択』で郡山城攻めをやりましたが，その時に赤外線の航空写真で，木があっても曲輪がよく分かったという新しい尼子方の陣城が幾つか発見されたということで，ご覧になっていた方も多いと思います。私もあの場面ではちょっと出ましたが。いわゆる陣城を構えて攻めるんですが，なかなか落ちない。

これは，なぜ落ちないかというと，この時点で毛利元就は大内方なんです。大内義隆が，あの有名な，その頃はまだ陶隆房と言っていました，後の晴賢，これを応援によこすということで，後詰（ごづめ）というんですが，この後詰があるかないかが決定的に大事なんですね。後詰がなければ，やはり攻められれば落ちるんです。落ちるんですが，後詰，いわゆる援軍が来ると，今度は包囲している敵，つまり尼子方は，城内にいる毛利と，援軍できた陶，大内軍によって，要するにサンドイッチ，挟み撃ちになる。それで結局，尼子のほうは撤退していくことになる。だから，そういった意味では後詰の援軍があって勝利ということになるんです。

その下の第１次月山富田城の戦いは後詰がなくて勝った例です。これもちょっと面白いんですよ。尼子晴久の月山富田城を大内義隆が攻めるんですね。今でも尼子の居城の月山富田城の真向かいには京羅木山という山があって，そこに大内は本陣を置いて，高さが同じぐらいですから結構にらみ合った。おそらく，こちらで大きな声を出せば向こうにも届くだろうし，向こうで大きな声を出せばこちらにも届くだろうし，結構そういった緊迫した城攻めが始まるわけです。

この時，ちょっと面白いのは，尼子のほうに後詰はなかったんですね。だけど尼子は勝っている。それはなぜか。ちょうどこのころ，尼子と大内は勢力が拮抗していて，当時は武将たちも強いものになびくという言い方をしますが，やっぱり負けた側にはつきたくない，勝ち残りたいという思いが強いものですから，この地図（【資料３の

左下】）でいうと赤穴城とか三刀屋城という尼子方の支城にいた人たち，三沢とか三刀屋の武将たちが，この時に優勢だった大内軍につき，攻める側についています。ここで，普通「三沢」と書いて，私も「みさわ」と読んでいたんですが，これはどうも「みざわ」というのが読み方として正しいというのを現地へ行って知りました。

さて，その城攻めが始まって少したって，やっぱり尼子のほうがいいなということで，その人たちはまたお城の中に入ってしまうんですね。城攻めをしていた連中が尼子の軍門に入る。となると，城攻めをしていた大内のほうが，このまま城攻めは危ないぞということで撤退を始める。

城攻めで，だいたい負け戦の典型は撤退のときです。撤退のときに追撃されるということで，この時，大内義隆は這々の体で山口に逃げ戻る。逃げ戻る途中で，自分の養子，大内晴持（はるもち）が船に乗って逃げようとしたところ，転覆して死んでしまうということで，この後，大内義隆自身は戦国大名としてのやる気をなくしちゃうという，そういったドラマにもなっていくような話になり，例の陶隆房の下剋上，後は陶晴賢と言いますが，その謀反に遭うということになります。

そんなわけで城攻め，そして城をいかに守るかという中世人のまさに頭の使いどころというか，そういったのが城に残っているわけで，そういったところを，いろんな歴史と合わせながら現場を歩くということがいかに大事かというところを，今日のお話の一つの結論にしたいと思います。

さて最後，「おわりに」という所に入りますが，要するに中世城郭，山城，特に見直されてきました。それによって，いろいろと各地方自治体が整備に力を入れてくれたおかげで，結構歩きやすくなっているんですね。歩きやすくなっているということと合わせて，やはり観光というかたちでのいわゆる集客と言いますか，そういったところにも各地方自治体が力を入れてくれるようになり，非常に城そのものが身近な存在にはなってきました。

ただ，やはり山城は怖いというところも最後に少しお話しておかなければいけませ

ん。例えば場所によってはマムシがいたり，あるいはクマンバチがいたり，そういったあれで一人で行くとちょっと危ないなという場面は私も幾つか経験しています。それこそ，クマンバチに追いかけられたこともありますし，そういった意味では一人単独行というのは危険だなと。そんなに高い山でなければいいですが，道を間違えそうになるようなところは，やはり何人かで行ったほうがいい。

それから，やっぱり長袖ですね。どうしても暑いと半袖で山へ入るんですが，漆の木みたいな樹木に触ってかぶれてしまったり，もちろん蚊に刺されたり，毒虫に刺されるということもあるので，そういった意味では山城を歩くときはそれなりの装備というか格好で登ることが必要だし，クマが出る危険があるような所は，やはり鈴を持って登るとか，それなりの準備と覚悟が必要だと思います。

いずれにしても，そういったかたちで中世のお城がこれだけ見直されるようになってきた中で，さらにこれから発見があるだろうと思います。もちろん発掘調査によって新しい情報も入ってくるだろうし，そういった中で，これまで知られていなかったその土地の歴史が浮き彫りになってくる。これは私は，やはりお城の存在感というか，そういったものを特に感じているからかもしれません。

今日は中世山城の魅力ということで，私なりに感じている魅力の幾つかをお話させていただきました。今日のお三方が時間どおりぴったり終わったので，私もまねして時間どおり終わらせていただきます。長時間，ご清聴をありがとうございました。

閉会あいさつ

公益財団法人広島県教育事業団

埋蔵文化財調査室長　岩本　芳幸

本日は小和田先生の講演があるということで，初めて埋蔵文化財調査室の催しに参加していただいた方もいらっしゃるのではないかと思います。戦国史研究で著名な小和田先生のお話を広島で聴ける機会はそれほどありませんので，本日は満足して帰っていただけるのではないかと思っております。

さて，野原山城跡の調査について報告をいたしましたが，広島市安芸区のほうも西日本豪雨の被災地でありました。豪雨の後も，この野原山城跡の調査を行ったわけでありますが，非常事態ということで私も数週間ほど応援にまいりました。まず行くのが大変でして，山陽道や国道２号線が通行止めになっており，普通だったら西区観音の調査室から40分程度で行くことができたのですが，行き帰りに片道５～６時間かかったということもありました。７月下旬には，この野原山城跡の遺跡見学会を予定していましたが，豪雨被害のために開催することができませんでした。今回，このような形で報告をさせていただいたわけですが，時間の関係もありまして詳しく報告することができなかったことをおわび申し上げます。

なお，当調査室の事業につきまして，いち早く知っていただくことができるのがホームページということになります。時々で構いませんので，ぜひ当調査室のホームページをご覧いただければと思っております。

最後になりますけれども，本日ご来場いただき，ご清聴いただきました会場の皆様方に対しまして，心から御礼を申し上げて閉会のあいさつとさせていただきます。

本日は，どうもありがとうございました。

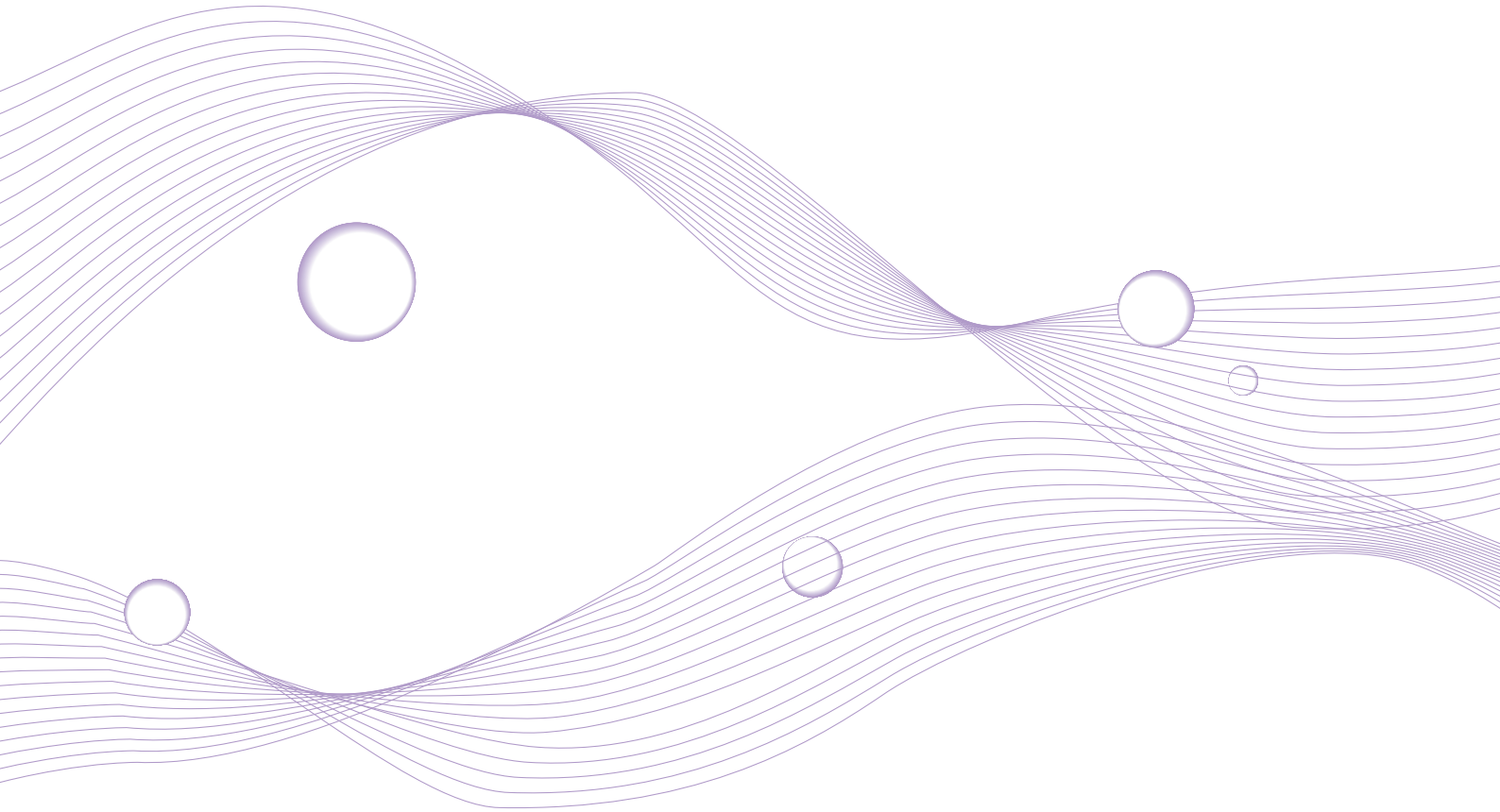
これまでの『ひろしまの遺跡を語る』開催内容

開催日，開催場所	タ　イ　ト　ル　，　内　容
昭和62年７月19日 【広島県立社会教育センター】	『ひろしまの遺跡を語る－最近の発掘調査成果報告－』 （記念講演）『広島県の考古学』潮見浩（広島大学教授）
平成２年２月４日 【広島県立生涯学習センター】	『ひろしまの遺跡を語る－昭和63年度発掘調査の概要－』
平成２年９月１日 【広島県情報プラザ】	『ひろしまの遺跡を語る－平成元年度発掘調査報告会－』
平成３年２月１日 【広島県情報プラザ】	『ひろしまの遺跡を語る－平成２年度発掘調査報告会－』
平成４年10月30日 【三次市文化会館】	第１回『ひろしまの遺跡を語る－平成３年度発掘調査報告会－』
平成５年２月６日 【広島県民文化センター】	第２回『ひろしまの遺跡を語る－平成３年度発掘調査報告会－』
平成５年11月20日 【広島県立歴史博物館】	第１回『ひろしまの遺跡を語る－平成４年度発掘調査報告会－』
平成６年２月５日 【広島県民文化センター】	第２回『ひろしまの遺跡を語る－平成４年度発掘調査報告会－』
平成６年７月23日 【三次市文化会館】	第１回『ひろしまの遺跡を語る－平成５年度発掘調査報告会－』
平成６年９月24日 【広島県民文化センター】	第２回『ひろしまの遺跡を語る－平成５年度発掘調査報告会－』
平成７年８月20日 【広島市南区民文化センター】	第１回『ひろしまの遺跡を語る－平成６年度発掘調査報告会－』
平成７年９月30日 【広島県立歴史博物館】	第２回『ひろしまの遺跡を語る－平成６年度発掘調査報告会－』
平成７年11月11日 【広島県立歴史民俗資料館】	第３回『ひろしまの遺跡を語る－平成６年度発掘調査報告会－』
平成８年10月19日 【三次ロイヤルホテル】	第１回『ひろしまの遺跡を語る－平成７年度発掘調査報告会－』
平成８年11月10日 【広島県民文化センター】	第２回『ひろしまの遺跡を語る－平成７年度発掘調査報告会－』
平成８年11月16日 【広島県立歴史博物館】	第３回『ひろしまの遺跡を語る－平成７年度発掘調査報告会－』
平成９年10月26日 【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る－平成８年度発掘調査報告会－』 （基調講演）『人骨が歴史を語る』松下孝幸（土井ヶ浜・人類学ミュージアム館長）
平成10年10月18日 【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る－設立20周年記念－』 （基調講演）『考古学からみた邪馬台国時代』石野博信（徳島文理大学教授）
平成11年11月21日 【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る』 （特別講演）『現代の科学から歴史が見えてくる』三辻利一（奈良教育大学教授）
平成12年11月19日 【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る』 （特別講演）『海のシルクロードと東西文化交流』櫻井清彦（早稲田大学名誉教授）
平成14年２月24日 【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る』 （特別講演）『前方後円墳のはなし』近藤義郎（岡山大学名誉教授）
平成14年11月３日 【広島県立生涯学習センター】	『ひろしまの遺跡を語る』 （特別講演）『宇那木山古墳群の発掘調査からわかったこと』 古瀬清秀（広島大学大学院教授）
平成16年１月17日 【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る』 （特別講演）『文化財の保存と活用』河瀬正利（広島大学大学院教授）
平成16年12月26日 【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る』 （講演）『戦国時代史研究と遺跡調査』岸田裕之（広島大学大学院文学研究科長）
平成18年１月７日 【アステールプラザ】	４法人共同企画『新春放談　初夢ひろしまの城物語』 （基調講演）『ひろしまの城』三浦正幸（広島大学大学院教授） （シンポジウム）『発掘されたひろしまの城を語る』

開催日，開催場所	タ　イ　ト　ル　，　内　容
平成19年１月６日 【アステールプラザ】	４法人共同企画『新春放談　ぶらりひろしま江戸の旅』 （基調講演）『街道筋の暮らしぶりにみる「エコ」生活』石川英輔（作家） （シンポジウム）『ひろしまの江戸時代を掘る』
平成20年１月12日 【アステールプラザ】	４法人共同企画『新春放談　飛鳥美人なに想ふ』 （基調講演）『ニューファッションへの道』増田美子（学習院女子大学教授） （シンポジウム）『ひろしまの装・飾・美をさぐる』
平成21年１月10日 【広島県立生涯学習センター】	『平成20年度ひろしまの遺跡を語る』 （講演）『最近の発掘調査からみた広島県の古墳』古瀬清秀（広島大学大学院教授） （シンポジウム）『ここまでわかった広島の古墳時代』
平成22年１月16日 【広島県立総合体育館】	『平成21年度ひろしまの遺跡を語る』 （講演）『卑弥呼と箸墓古墳』春成秀爾（国立歴史民俗博物館名誉教授）
平成23年１月８日 【広島県民文化センター】	『平成22年度ひろしまの遺跡を語る』 （基調講演）『安芸・備後の古墳と古代国家形成』松木武彦（岡山大学大学院教授） （シンポジウム）『古墳時代の暮らしと心』
平成24年１月21日 【広島県民文化センター】	『平成23年度ひろしまの遺跡を語る』 （基調講演Ⅰ）『朝鮮半島，吉備，そして備後の寺々』 亀田修一（岡山理科大学教授） （基調講演Ⅱ）『百済僧弘済の三谷寺をさぐる』松下正司（比治山大学名誉教授） （シンポジウム）『古代の東アジアとひろしまー白村江の戦いと寺町廃寺ー』
平成25年１月19日 【広島県民文化センター】	『平成24年度ひろしまの遺跡を語る』 （基調講演Ⅰ）『旧石器時代の環境とくらし』 藤野次史（広島大学総合博物館教授） （基調講演Ⅱ）『山陰から中国山地の旧石器文化』 丹羽野裕（島根県古代文化センター長） （シンポジウム）『中国山地の旧石器文化を考えるー移動生活と運ばれたモノー』
平成26年１月11日 【広島県民文化センター】	『平成25年度ひろしまの遺跡を語る』 （基調講演Ⅰ）『発掘調査から見た広島県の中世城館』 小都隆（(公財）広島県教育事業団埋蔵文化財調査指導委員） （基調講演Ⅱ）『戦国時代の山城を掘るー発掘調査で明らかになった山城の実像ー』 中井均（滋賀県立大学教授） （シンポジウム）『発掘城館から探る中世社会』
平成27年１月24日 【広島県立美術館】	『平成26年度ひろしまの遺跡を語る』 （講　演）『描かれた日本古代の船ー考古学から日本の古代船を考えるー』 深澤芳樹（前奈良文化財研究所副所長） （座談会）『御領遺跡の船の絵と古代の船』
平成28年１月23日 【広島県民文化センター】	『平成27年度ひろしまの遺跡を語る』 （講演Ⅰ）『古代の鋸』伊藤実（(公財)広島県教育事業団埋蔵文化財調査室長） （講演Ⅱ）『古代の製鉄技術』 角田徳幸（島根県立古代出雲歴史博物館交流・普及課長） （講演Ⅲ）『古代の鍛冶技術』安間拓巳（比治山大学現代文化学部教授） （座談会）『古代の鉄と鉄器を考える』
平成29年１月14日 【広島県民文化センター】	『平成28年度ひろしまの遺跡を語る』 （講演Ⅰ）『亀居城跡周辺の地形変遷と幕長戦争』 石田雅春（広島大学75年史編纂室准教授） （講演Ⅱ）『幕長戦争と西国街道』三宅紹宣（広島大学名誉教授） （討論会）『幕末動乱期の西国街道』
平成30年１月27日 【広島県民文化センター】	『平成29年度ひろしまの遺跡を語る』 （講　演）『邪馬台国時代の西部瀬戸内』下條信行（愛媛大学名誉教授） （フリートーク）『瀬戸内から考える邪馬台国の時代』
平成31年１月19日 【広島県民文化センター】	『平成30年度ひろしまの遺跡を語る』 （報告Ⅰ）鞆港湾遺跡の発掘調査 （報告Ⅱ）野原山城跡の発掘調査 （報告Ⅲ）上ノ城跡の発掘調査 （講　演）『中世山城の魅力』小和田哲男（静岡大学名誉教授）

公益財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室　活動報告　第９集
平成30年度 ひろしまの遺跡を語る
ひろしまの遺跡2018－報告と講演－　記録集

発行日　令和元（2019）年12月10日
編　集　公益財団法人　広島県教育事業団事務局　埋蔵文化財調査室
〒733－0036　広島市西区観音新町四丁目８番49号
TEL：(082) 295－5751　FAX：(082) 291－3951
発　行　公益財団法人広島県教育事業団
印刷所　鯉城印刷株式会社



公益財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室 活動報告 第９集